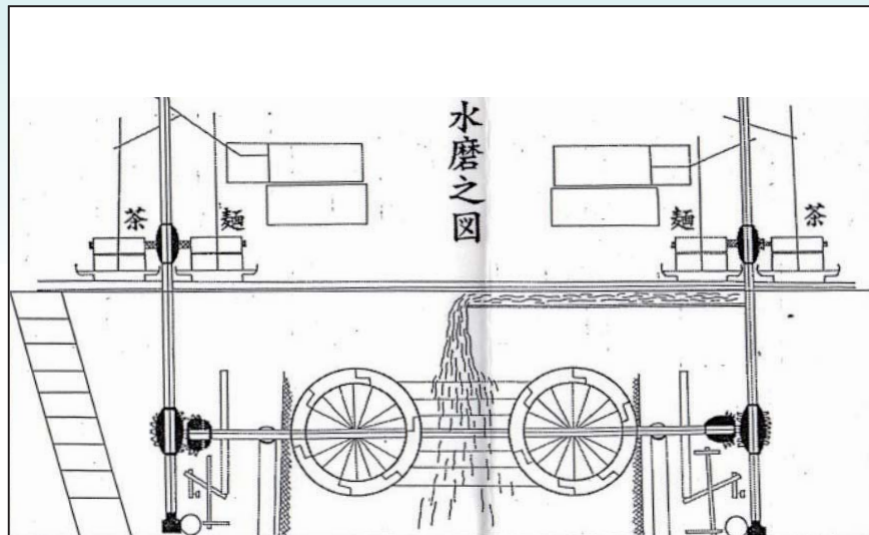




静岡で製作した1/5サイズの「水磨様」復元模型  
高さ1700mm×幅1800mm×奥行1250mm



水磨之図

聖一国師は、静岡茶の祖、蕎麦うどんの祖、饅頭の祖、博多織の祖、博多人形の祖、博多祇園山笠の祖と言われていますが、経営者としての顔があると思います。

国師号を日本で最初にいただいたのですが、承天寺の創建、東福寺の開山、天皇の命令で東大寺の幹事職となり、將軍の命で建仁寺を復興し、法性寺大殿を造営し、尊勝寺の幹事となり、東大寺の幹事となりというように、現在で言えば創業と再建の専門家としての才能を評価されたのではないかと。

### 水車と石臼と篩による粉製造技術

東福寺所蔵の「大宋諸山図」は、聖一国師が宋に渡って修行をした時に、いろいろなお寺の精密なパースを沢山書いたもの。その最後に突然、出てくるのが水車の絵「水磨之図」です。

水車と石臼を高句麗の僧が日本に持ち込んだという記録が「日本書紀」に出てきます。これは九州大宰府の観世音寺と東大寺「碾磑門」に残っていますが、この石臼では粉は碾けないそうです。

500年の空白の後、出てきたの

が聖一国師の「水磨之図」です。当時のお坊さんには、最先端文化と最先端技術を持つてくる役割がありました。「水磨之図」は、日本最初の工場図面と言われています。

篩（ふるい）の全国シェア80%の田中三太郎商店を訪問しました。粉とふすまを分離し、白い粉を作るには精度の高い篩が必要です。中国では馬の尾の毛を編んで篩を作りました。次に絹の糸を編んだ篩が作られました。精密な絹篩は、現在もスイスから輸入しています。

田中商店の工場では、蕎麦粉を碾く直径3mの石臼を作っていました。抹茶も、蕎麦粉も、石臼以外は風味が変わってしまうので、使えないそうです。

水車という動力、回転させる石臼、篩が「水磨之図」に載っていて、「茶」「麵」と書いてあります。

### 最先端技術と結ぶ粉産業の祖として評価する

工業製品の9割は、粉から始まります。素材産業の元です。磁気テープなどに添付したり、複写機のトナーなどに使う超微粉末は、最先端技術と言えます。そのルーツの「粉」製造技術を伝えたのが聖一国

師という評価をしたい。我々は聖一国師を静岡茶の祖としてしか知りませんでした。製粉業、麺類業、菓子業、粉体工学学会は、聖一国師を祖と仰いでいます。

ビジネスでも、まちづくりでも、レガシー（遺産）を知って、それを解いて、現在と未来に結びつけることが重要ではないかと思っています。

レガシーには2つの意味があります。レガシーを地域の誇りにすることは大事で、それが基本になることは間違いないと思います。

ただし、このレガシーを地域振興、観光振興として、外に売ることになったら、工夫がいろいろあります。

お茶の祖は、全国的な評価としては、栄西です。

聖一国師は、粉文化、粉技術、粉産業の祖という視点で評価すると、最先端技術と結びつけることができます。商工会議所が静岡の歴史的レガシーを利用していくときに、こういう視点が必要ではないでしょうか。

（文責：静岡商工会議所 企画広報室）